

テモテへの手紙第一 2 章 8-15 節 「礼拝における男女の秩序」

1A 敬虔にかなう行ない 8-10

1B きよい手の祈り 8

2B 良い行ない 9-10

2A 従う心 11-15

1B 教えについて 11-14

2B 子を産むことについて 15

本文

テモテへの手紙第一 2 章 8 節からですが、私たちの学びはパウロが若い牧者、テモテに対して書いた手紙を読んでいます。この手紙から私たちは、一つの大きな主題を読むことができます。それは、神が救い主であるということです。「私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエス(1:1)」という言葉から始まります。そして、私たちが目を向けるべきは「信仰による神の救いのご計画の実現(4 節)」であり、その目標は「きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出てくる愛(5 節)」であります。しかし、テモテが牧会を任されたエペソにある教会では、論議を引き起こすような違った教えを説く者たちがいたという状態でした。

そこでパウロは、そのような教えに心が奪われないように人々を戒めるように教え、神の救いのご計画の中で私たちが敬虔な生活をするように勧めています。「敬虔」というのは、「神に似ている」ということです。神のかたちに似せて造られた私たちが、罪に拠ってそのかたちが損なわれたのですが、そこから神のかたちに回復するのが救いであります。そこで、キリスト者にとってどのように社会の中で生きていくべきか、また教会としてどのような証しを立てていくべきかを教えています。

それは、すべての人のために祈ることであり、上に立てられている権威を尊ぶことです。言い争いをしたり、反抗することは、キリスト者は外部に対してあってはならない態度です。すべての権威は神から来ていると、ローマ 13 章 1 節は教えています。実に、三位一体の神ご自身の中に権威系統があります。父なる神、子なるキリスト、聖霊は、同質で、同等な神格であります。すべての元となる方は父なる神であり、御子キリストは御父に愛され、その愛の中で御父の言われることにすべて従われました。そして聖霊は、もうひとりの助け主であり、御子また御父を証しする方です。この方が私たちの救いに関わっておられるのですから、当然ながら被造物にある権威や秩序を大切にすることで、主の救いは進んでいくのであります。

そこで 2 章では、すべての人のために祈る姿が書かれています。特に、王であるとか高い地位にある人々のために願い、祈り、執り成し、感謝をささげるように命じられています。このことがで

きることによって、私たちの間に敬虔が養われ、威厳を保ち、平安で静かな生活を歩むことができます。そしてすべての人を救いたいと願う神の御心、唯一の仲介者、贖い主であるイエス・キリストを人々が知ることができるのです。

その秩序の中で、さらに私たちには男と女の中にある秩序があります。神がアダムを造られ、アダムからエバを造られました。今は、こうした区別がないがしろにされる時代に生きています。もちろん、キリストにあってすべて人が一つであり、男女の差別はキリストによって取り除かれました。しかし、その働き、役目はそれぞれに神が与えておられて、そこに秩序があるのです。権威そのものに対する反発、人間主義的な考えが社会に浸透しています。そして男と女の区別をなくすような悪い平等主義が力を持っています。

しかし、神の立てられた秩序や順番の中にあることが、もっとも安全で、楽であり、健全なのです。スポーツの世界でもそうですね。私は卓球部に所属していましたが、ラケットを振る時に力を入れずに、そのまま体の中心部分を回転させて回す時に、スムーズに振れます。テニスのラケットもそうですし、ゴルフのクラブのそうです。それに力を入れてしまうのは、頑張っているのですが、極めて不自然であります。そうした秩序が世界の中にあり、そして教会においては祈りや御言葉の教えに基づく、霊的秩序が存在するのです。

1A 敬虔にかなう行ない 8-10

1B きよい手の祈り 8

8 ですから、私は願うのです。男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。

2 章において、すべての人のために祈りが捧げられるようにしなさいと勧めながら、具体的に教会において公の集会や礼拝において、その祈りを主導するのが男たちということです。神から与えられた権威を、祈りによって行使することです。人々の前に立って、人々を代表して神の前に祈ることです。

そして、「手を上げて祈る」行為が書かれています。これは、聖書の中で公の祈りを捧げる時の姿勢としてしばしば登場するものです。「1列王 8:22 ソロモンはイスラエルの全集団の前で、主の祭壇の前に立ち、両手を天に差し伸べて、言った。」とあります。主の前に出て祈るのですが、この時に大切なのは、「きよい手を上げて祈る」ことです。主の前で正しい姿勢にいるからこそ、その祈りが主の前に受け入れられます。そうでなければ、主はたとえ手を上げて祈っていたとしても、主は受け入れられません。「イザヤ 1:15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。」私たちは、祈りについてそれが聞かれるか、聞かれないかということをいつも注目しますが、

まずもって神が私たちの祈りを聞く義務はないのです。神に祈りが聞かれるその前提に、主の前に心が清められているということがあり、主の心に自分が一つになっていることが必要です。「詩篇 66:18 もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。」

そして、「怒ったり言い争ったりすることなく」という言葉があります。先に、論争を巻き起こすような違った教えを強く戒めていましたが、その中で怒りや言い争いというものが起こっています。怒るということはどういうことなのか？「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。(ヤコブ 1:20)」とあります。義というのは、自分にあるという主張が、怒りなのです。しかし、私たちは、義は神にのみ属する、ゆえに怒りも主が行われるものだということが分かります。もちろん、不義に対して怒ること、その感情を否定するものではありません。しかし、その感情に身を委ねてはいけない、主に祈る中で、主にその怒りを任せることが必要です。

言い争うということも同じです。自分が納得できないから、自分の理解を捨てられないから、それを主張という形にして言い争います。しかし、これは神に対する不信の表れです。神が何かを行なわれています。自分には理解することができません。しかし、神が行われているのです。したがって、へりくだって主のなされることに自分を明け渡し、その任せた心の中で神に対して祈ります。

多くの事柄が、祈りの生活に影響します。神への信頼、そして人との関わりにおいて、緊張状態がある時にその祈りは妨げられます。いけにえを捧げようとするときに、誰かが自分に敵対しているのならば、まず仲直りしなさいと主は言われました。そして夫婦の関係において、こんな勧めがあります。「1ペテロ 3:7 同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」ですから、私たちは積極的に、祈りの妨げになるようなことを取り除いていき、祈りに専念することができるようにしなければいけません。

2B 良い行ない 9-10

9 同じように女も、つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪の毛の形とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、10 むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行いを自分の飾りとしなさい。

「同じように」という言葉から始まっています。この箇所を読むと、女たちが服装や化粧に気を使っているはいけないという禁止事項のように解釈してしまいがちです。しかし、同じようにという言葉がするように、あくまでも神の前に歩む中で集中すべき点を挙げています。それは、「神を敬う」という部分と、「良い行い」の部分です。神を敬うとは、敬虔のことです。先に話したように、神に似た者になるということです。そして、具体的には良い行いであります。主への信仰から出てくる、神の愛、そしてその中で良い行いをしていくということです。

しかし、しばしば焦点がずれてしまうことがあり、それがここに書かれてあるような着飾ることに集中してしまうことです。外側の美に何か本質があるかのように動いてしまいましたが、大事なものは内側の美であり、そこに集中しましょうという勧めなのです。あるいは、神が自分に与えられた天然の美に自信を持つ、ということも含まれるでしょう。私たちは以前、箴言を学びました。そこにこんな言葉がありました。「箴言 31:30 麗しさはいつわり。美しさはむなしい。しかし、主を恐れる女はほめられたえられる。」この女は、家の中で多くのことを成し遂げていました。主を恐れるところから出ている、あらゆる良い行いを着飾っていたのです。

2A 従う心 11-15

1B 教えについて 11-14

11 女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。12 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。

教会において、公の活動において祈りは大事な働きですが、もう一つは、聖書を教えることです。テモテへの手紙には、「健全な教え」という言葉が数多くでてきます。神の救いのご計画、そして敬虔に生きることについての、神の真理であります。これを教える時、パウロは女に対しては、「静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。」と教えています。

これは教えるはいけない、ということの意味していません。また、発言してはいけないということでもありません。聖書全体において、女が預言をし、教えている箇所が数多く出てきます。旧約聖書では、女預言者フルダがいました。デボラもいます。新約聖書では、プリスキラが夫アクラとともに、説教者アポロを個人的に教えて、イエスの道をさらに正確に知らせました。伝道者ペリポの娘たちは預言者でした。テトスは、年上の婦人が年下の婦人を教えさせるようにパウロから指示されています。またテモテ自身も、母親と祖母から聖書の教えを受けています。女の人たちが教えることは、もちろん良いし、むしろその賜物を用いていくことを聖書は奨励しています。

また女は主に用いられています。イエス様の宣教の旅についてきた、数多くの女がいました。復活を目撃したのは女たちです。そして手紙の中には、数多くの女性にパウロは挨拶をしています。ですから、女が動いてはいけないということではないのです。ここではあくまでも、聖書についての教え、教理と言ってもよいでしょう、そして教会全体を治める立場にいて教えるということの意味します。それは3章、監督の資格を読むとよく分かります。一人の妻の夫であり、よく教えることができるという条件があります。ですから、私は女牧師という立場は、聖書的ではないと考えます。

しかし、ここで大事なものは「静かに」という言葉です。これは沈黙するというのではなく、2節にある「平和で静かな」という言葉の意味で使っています。神の立てられた秩序の中において、そこに落ち着いているということです。

13 アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。14 また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。

これは、上の、女が支配してはいけない、教えてはいけないという戒めの理由であります。創造に秩序があり、順番がありました。アダムが造られ、エバが彼から造られました。この秩序が教会の中でも生かされていくということです。けれども、すべての女性がすべての男性に従うということでもありません。男が教える立場、治める立場にいるべきだということです。

そして、墮落においても順序がありました。女が初めに惑わしを受け、アダムが罪を犯しました。これは女がより惑わしを受けやすいということでは決してありません。そうではなく、女が男を支配するようなかたちで物事を進めていけば、そこには秩序がなくなり、人々が罪を犯しやすい環境を作ってしまう。男アダムが罪を犯しました。そこには責任があるのです。ですから、男に責任があるという体制、その秩序ができていないといけない、そこに健全な教えがあるということです。

2B 子を産むことについて 15

15 しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。

ここは解釈が難しい箇所です。子を産まない女はみな地獄に行ってしまうのでは絶対でないことは、他のパウロの書簡、また聖書全体からもそんな結論は出せません。ここの「子を産む」というのは、実はその前の節の、エバについての話の続きになっているというのが、主な解釈です。つまり、創世記3章15節に出て来る、「女の子孫」です。確かに、エバが初めに惑わしを受けて、アダムが罪を犯し、罪が全世界にはいったのですが、女の子孫、つまり、イエス・キリストが処女マリヤから産まれることによって、救いが全世界にもたらされました。つまり、ここの「子を産む」というのは、惑わしも女から来ており、罪の現状も女が子を産むという弱いところから来ていたけれども、救いも女から来た、その弱さの中に神の救いが現れたという意味です。

この福音が、「愛と信仰と聖さ」によって伝わるというのが、パウロがここで言いたかったことです。つまり、女が教えることによって、人々に神の救いが伝えられるよりも、神の秩序の中にあって良い行ないを飾り物とし、愛と信仰と聖さによって、無言の行ないであっても、それが人を救いへと導くのです。1ペテロ3章にそのことが書かれています。そして、子を産むということ、つまり家庭をかえりみるということは、夫も含めて3章で強調されていることであり、このことあつての教会での営みだということになります。

この秩序、平和と静けさがあつて、それで神の救いがこの世に現われる。集中すべきは、祈りと教え、そしてその動機は愛と信仰と聖さであります。